九条の樹 64号

2016年12月発行

東久留米「九条の会」ニュース

発行：東久留米「九条の会」
連絡先：℡ 042-473-9489（鈴木）

日本国憲法　第９条

①日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。
②前項の目的を達するため、陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない。

戦争はイヤ！市民パレード

「戦争法」に反対し、自衛隊の南スーダン派遣に反対する「戦争はイヤ！市民パレード」が11月５日、行なわれ、約１８０人の市民が参加しました。「戦争はイヤ！声をあげよう実行委員会」が呼びかけ、今回で６回目です。「憲法守れ、九条まもれ」「子どもの未来に戦争いらない」「戦争する国絶対反対」「南スーダンへの派遣はやめろ」「他国の人に銃をむけるな」「辺野古を守れ！高江も守れ」「戦争法は今すぐ廃止」と訴えました。

パレードに先だって、日本平和委員会常任理事の川田忠明さんが、「ストップ戦争法発動！南スーダンで自衛隊の犠牲者を出すな」と題して講演を行いました。

九条の会をはじめとする、市民による草の根の運動が政治を変える大きな力になっていることや、憲法９条を生かした外交こそベストで、戦争を放棄しているのだから真剣に外交による解決を目指すことが重要だと強調しました。

（講演内容は要約して2、3ページに掲載）

ストップ戦争法発動！
南スーダンで自衛隊の犠牲者を出すな
川田忠明さん講演

（日本平和委員会常任理事）

南スーダンに自衛隊派遣

安保法制がいよいよ全面的に発動される段階に来ています。二つ大きな問題があります。一つは南スーダンで自衛隊が今行っている平和維持活動に、武器使用範囲を拡大すること。もう一つは集団的自衛権行使が新たにできるようになりましたが、それをやるためにアメリカ軍と自衛隊が訓練を強めようとしていることです。

南スーダンで駆けつけ警護をすることになり、今までは自分を守るために正当防衛で武器を使ってもいいことになっていました。これからは、離れた場所で武力勢力に襲われた国連職員やＮＧＯ職員、他国軍の兵士を助けに向かう任務のために武器を使うと、拡大される。宿営地を共同で守るためにも武器を使える。使用範囲が広がります。

南スーダンに11月から青森を中心とした部隊３５０人が行くことになっています。稲田防衛大臣は「国連やＮＧＯから要請があったらできる範囲でやる」と言ってますが、ＮＧＯの人達はこの国は危ないと言ってほとんど出ていってます。できる範囲でといっても衝突が始まって自衛隊だけ途中で帰るなどできません。

南スーダンで７月に大きな紛争がありました。戦車が出る内戦です。国連のＰＫＯ活動に自衛隊が行く場合は停戦ができていないと行けないことになっています。どう見ても停戦は崩れています。７月は２７０人亡くなりました。首都のＰＫＯ本部と隣の難民施設も攻撃されています。しかも無差別に人を殺すだけでなく女性に対する性的暴行も野放しという状況です。４８０万以上が栄養失調です。ここに必要なのは停戦をして人道支援をすることが切実に求められています。ですから南スーダンから自衛隊は撤退するべきです。軍事介入しても何の役にも立ちません。

住民が虐殺されてるのにＰＫＯ部隊が何もしなかったという報道、批判がありましたが、手出しできなかったのは、虐殺しているのが政府軍側だったからです。政府軍と衝突したらどうなるか、そういう状況のところに自衛隊をやるのは現地に対しても自衛隊員にとっても良くないと思います。

アメリカとの共同訓練

もう一つはアメリカとの訓練の問題です。今度はアメリカが戦争しているところへ行って支援する訓練をやってます。国民に見えにくいんです。マスコミには全面的には公開せずにやっています。

２０１４年は自衛隊が３万人以上、艦艇が25隻、航空機２６０機、米軍約１万人が参加しています。詳細は非公開でやられています。85年から日米でコンピュータでの演習もやっています。

訓練だけなら問題ないかというと、アメリカの対テロ戦争に協力するとなるとターゲットは日本国民です。昨年十一月バングラデシュで日本人殺害事件がありました。ＩＳが犯行声明を出して「イスラム国と敵対する有志連合の国民を標的にした。異教徒の日本人だ」と言ってます。アメリカが「イスラム国弱体化打倒のための有志連合」というのを２０１４年に作りました。66ケ国が参加、日本も入っています。

戦争法（安保法制）によって世界のどこであろうとアメリカが日本の安全のために戦ってくれているのなら支援しなければ

ならない。アメリカのカリフォルニアで戦争法ができる前から、自衛隊がアメリカ軍を支援するために訓練をやっています。アメリカが対テロ戦争で「日本の安全のためだ」と言えば日本の自衛隊が付いて行って支援しなければならない。こうなると自衛隊員の命も危ないがご存知のようにテロというのは軍隊を派遣した国で起こるのです。パリもベルギーもそうでした。

テロを口実に「共謀罪」を次の国会に出そうとしています。犯罪組織を対象としていますが、沖縄ではヘリ基地反対で座り込んでいる市民団体も犯罪者とみなしています。その話し合いをするだけで適用されてしまう危険があります。

北朝鮮　中国をどう見る

安保法制を必要だという人は、「中国や北朝鮮に対する抑止力になるんだ」と言います。

ところが、今年北朝鮮は核実験を1年間に2回もやった。それからミサイル威嚇発射を今年25発ぐらい、これまでにない数をやっています。安保法制は抑止力になっていない。北朝鮮には抑止力が通用しない。抑止力がだめなら何で止めるか。対話でしか止められない。北朝鮮は対話のシグナルも出しています。今年7月に北朝鮮政府の出した声明で「韓国にあるアメリカの核兵器を撤去して、核でのおどしをやめれば我々もそれ相応の措置をとるであろうし朝鮮半島非核化への画期的な突破口が開かれるであろう」これに対しニューヨークタイムズが「北朝鮮に対しては制裁以上に対話が求められている」と社説で書きました。

私はよく言うのですが、北朝鮮を見ていると子育てのことを思い出します。思春期の息子は「相談したいけど」と言ってこない。ちょっと突っかかってきたり悪さしたり、本音は話したかったんだなと思いますが、親もかっとなって「なんだこいつ」ってやったらけんかになる。

こちらも懐の深さが大事です。大事なのは東アジアの平和と安定です。北朝鮮は米韓軍事演習を怖がっていますし、アメリカとの対話が進まないことにいら立っています。悪循環で挑発しないと振り向いてくれないと繰り返していると危険です。そういう意味で対話というのは理想論ではなく現実的な解決策だと思います。

北朝鮮は面白い国で、核兵器廃絶を主張し、昨年の国連の核兵器禁止条約締結の作業部会で核保有国で唯一賛成しています。これが一つのポイントです。

中国について、ここも安保法制が抑止力になったかと言えばなっていない。中国というのは日本の暮らしと経済にとって欠かせない国です。鶏肉調理品の半分は中国からの輸入、冷凍野菜の半分、衣類は輸入の75％です。輸入全体の4分の1が中国です。中国にとっても輸出入の相手国の2位が日本です。こういう国と戦争できません。

南シナ海の領土問題は入り組んでいますこれも交渉しかありません。フィリピンがうまくやっています。中国の埋め立てに対し国連海洋法条約裁判所へ訴えて埋め立て違法という判決を出しました。フィリピンの新大統領が訪中し領土問題で「国際法と国連海洋法条約に基づいて解決する」という言葉を入れさせました。

「抑止力が大事だ」と言って、戦争法を無理やり通して、アメリカとの軍事協力ばかり考えている政府に比べれば、自分の国の平和と安全をどう外交で守るのかということをフィリピンのほうがはるかによく考えていると思います。

結論として憲法9条を生かした外交こそベストだということです。戦争を放棄しているのだから真剣に外交による解決を目指すことが重要です。

領土問題は半世紀かかっている例はざらです。尖閣諸島は皆が忘れるくらいかかってもいいです。資源や漁業はこういうルールでやろうと話し合いで決めればいいんです。安全安定がまず大事です。安倍政権になぜそれができないかと言えば憲法を捨てて日米同盟に頼りきっているからです。（終）

◆シリーズ

戦争体験記

忘れられない兄の背中

堀田弘子（東京・世田谷区）

みなさん。みなさんはドアのない電車が人を乗せて走っているのを見たことがありますか。しかも満員で。遠い地球のどこかの出来事ではありません。日本で実際にあった話です。

私がそんな電車に乗ったのは、今から七十年程前、第二次世界大戦が終結した翌年の、東京でのことです。

当時、私は十三歳で、西武池袋線の中村橋にある中学校まで、電車通学をしていました。

ある日、六歳年上の兄と一緒に清瀬駅で電車が来るのを待っていたときのことです。ガタゴトガタビシとホームに入って来た電車を見て、思わず息を飲みました。前の駅ですでに満員になっていたその電車には、ドアが一つもなかったのです。ポッカリ空いた四角い空間から落ちないようにと、何人かが必至の形相で踏ん張っているのです。

これに乗るのかと思うと、恐くて足が竦みましたが、迷っている暇はありません。次の電車は三十分待たないと来ませんし、いずれも似たような状況だろうと思いました。駅員さんが、駅で待っていた人達を車内にギュウギュウ押し込みます。

立ち竦（すく）んで最後になった私を、兄は思いきり車内に押し込み、自分は背中から前向きに乗り込みました。足を開いて踏ん張り、手を広げてドアのない上部をギュウと攫（つか）んで仁王立ちになり、電車が右に左に揺れるたびに、私やほかの乗客をドア代わりになって支えてくれたのです。もし兄が力尽きて落ちてしまったら……。怖くて震えました。

その後も何度か、ドアのない電車に乗り合わせましたが、出入り口のまん中あたりに巾20センチくらいの板が取り付けられたのは、何日もたってからのことでした。そんな板でも、あると思うだけでホッとします。板をくぐって電車に乗りこみ、通学しました。

後で聞けば、戦時中に金属類を供出したため、戦後の物資不足は甚だしく、ドア一つがなかなか付けられなかったのではないか、ということでした。

戦時中といえば、いちばん辛かったのは、仲の良い友達を防空壕に落とされた焼夷弾で亡くしたことです。これもまた後で聞けば、空襲を終えたB29が基地に帰るとき、機体を軽くするために残った焼夷弾を捨てたのだろう、との話でした。

戦後、疎開するまで住んでいた中野に母と訪ねた時のことです。見渡す限りの焼け野原に、焼けたトタン板で囲ったたくさんの小さなバラックを見た時、ここで何十何百の尊い命が失われたのかと、胸がつまったのを、今でもはっきりと覚えています。

《平和を考える本》

『マザーランドの月』
サリー・ガードナー作（小学館）

一九五六年。マザーランドと呼ばれる独裁国では多くの人々が貧困にあえぎ、密告され抹消されることが日常茶飯事となっていた。

両親が謎の失踪をして以来、年老いた祖父と目立たないように暮らしている、難読症の少年スタンディッシュ。

同級生からもバカにされていた彼が、ある日見つけたのは国家がらみの陰謀だった。

国では、巨大な月を模造し、科学者総動員で、月面着陸の瞬間を偽装・演出しようとしていたのだ。その目的のため、どれ程多くの人々が犠牲になったことか。両親も、数少ない友達一家も……。

少年は自分の命と引替えに、たったひとりで、それを阻止しようとする。

（高田桂子）